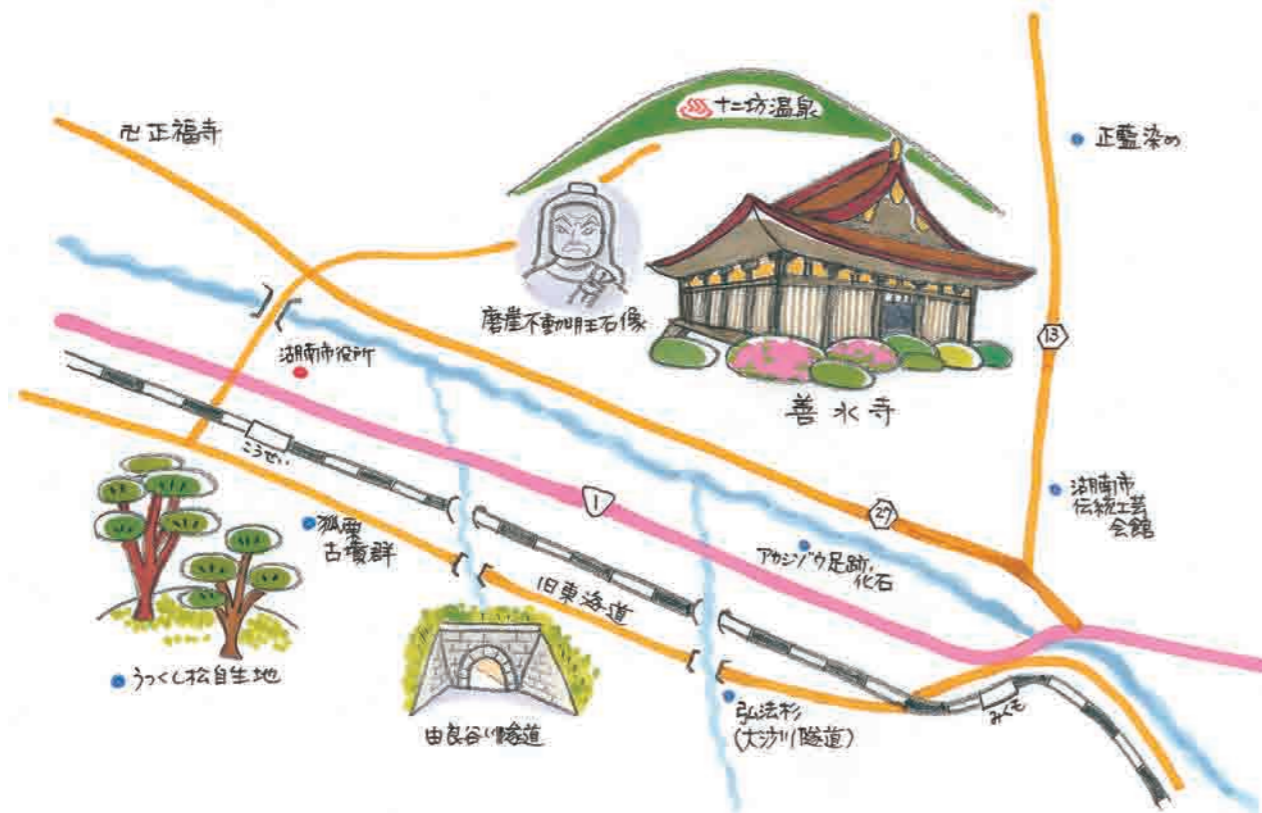


周辺の
みどころ

善水寺、常楽寺（湖南市西寺）、長寿寺（湖南市東寺）の三か寺は、近年、湖南三山と称される。いずれも当地を代表する天台寺院で中世に建立された本堂が残る。常楽寺は奈良時代に良弁僧正が開基したと伝える。本堂（国宝）と三重塔（国宝）は室町時代の建立で、本堂内には本尊の千手観音像、眷属の二十八部衆像などを安置する。長寿寺は聖武天皇の勅願によって創建されたと伝え、本尊の地蔵菩薩像を安置する本堂（国宝）は鎌倉時代の建築で、天台系本堂建築の古例として知られる。



国宝長寿寺本堂



【アクセス】

- JR草津線甲西駅下車、バス岩根下車徒歩10分

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】
(関連文献/関連施設)

- 宇野茂樹『近江路の彫像』雄山閣
- 西川杏太郎編 日本の美術第224号『近江の仏像』至文堂
- 伊東史朗 日本の美術第242号『薬師如来像』至文堂

善水寺

湖南市岩根



国宝善水寺本堂

寺の名称と創建の由緒に水が深く関わり、「天台薬師の池」と詠われた近江における代表的な薬師如来像を安置する天台系山岳寺院である。

善水寺は、寺伝によると和銅年間（708～715）に元明天皇が国家鎮護の道場として草創した和銅寺を前身とし、延暦年間（782～806）に桓武天皇が病を患った際、最澄が同寺で修法を行って香水を献じたところ、平癒したので善水寺と寺名を改め、天台寺院となったという。



善水寺

所在地 湖南省岩根



重要文化財薬師如来坐像

善水寺本堂

善水寺は、北に接する竜王町との境をなす、十二坊（岩根山）の山中に位置する。

本堂は延文5年（1360）の火災後、貞治3年（1364）に再建されたと伝えられ、様式などからも室町時代前期の14世紀の建立と考えられる。

桁行七間（幅が7つの柱間：19.7m）、梁間五間（奥行が5つの柱間：17.1m）と大型の仏堂で、屋根は一重、入母屋造の檜皮葺である。

正面の桁行七間、梁間二間が外陣、その奥中央桁行五間、梁間二間が内陣、内陣両脇の桁行一間、梁間四間が脇陣、内陣の更に背面側の桁行五間、梁間一間と張り出しが後陣である。

建物の特徴は、外陣にある大虹梁の架け方にある。滋賀県の一般的な中世仏堂は、外陣の空間を広く取るためか、梁間（建物の奥行方向）に虹梁を架け途中の柱を省略する。しかしこの本堂の外陣では、一般的な中世仏堂

とは90度方向が違う桁行（建物の横方向）に大虹梁を架け、中央の2本の柱を省略している。

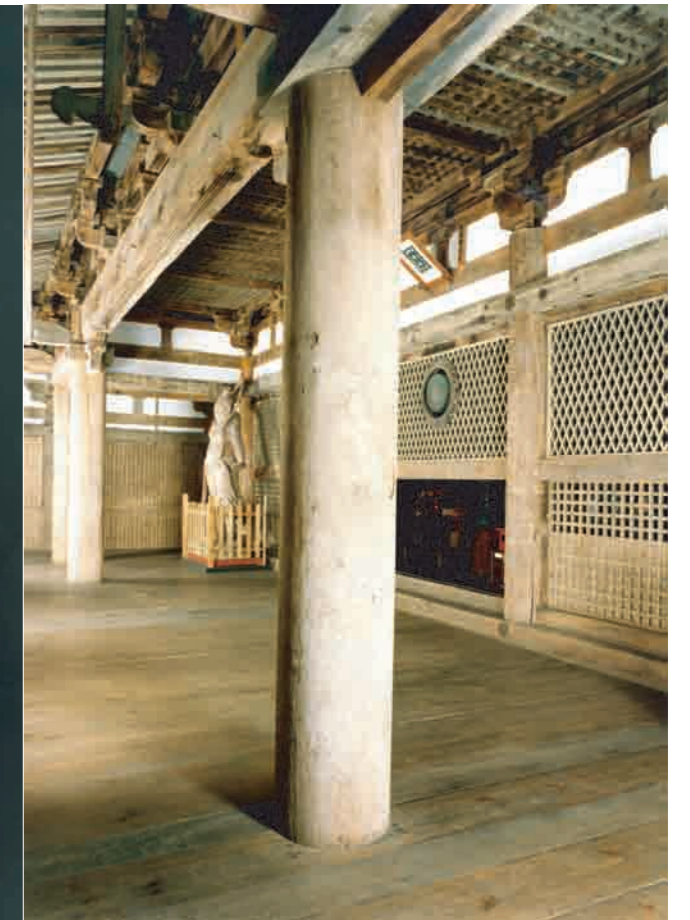
この本堂は和様を基調としながらも、大きな断面の丸桁、練り型付き実肘木、虹梁持ち送り肘木、手挟彫刻、棧唐戸などに禅宗様、外陣大虹梁の架構に大仏様と新様式の影響を受け、愛荘町所在の金剛輪寺本堂と共通点が多いことにも注目される。

善水寺の本尊と本堂内の諸仏

善水寺の本尊・薬師如来坐像（重要文化財）は秘仏として厨子内に安置される。像高102.5cmの坐像で、左手で薬壺をとる。頭部と体の主要部を一本の木材より彫り出した一木造の像で、表面に漆箔をほどこす。背中には長方形の孔をあけて内部を削り、背板を当てる。丸顔にふっくらとした頬や伏した目、撫で肩の体形は平安時代後期に完成する和様彫刻の作風に通じるが、体部には重量感が残り、衣文の襷に鏝立った表現が見られるなど、



重要文化財薬師如来坐像



善水寺本堂内陣



重要文化財薬師如来坐像に
納入されていた粉

平安時代初期の古い様式も残している。

本像は明治時代に保存修理が行われ、その際に像の内部から麻袋に入れた粉および死後の成仏を願い、本像に結縁を結んだ人々の名を墨書で記した紙（結縁交名）が発見された。結縁交名には平安時代中期の正暦4年（993）に像が造られたことが記される。この時期の造像銘を有する仏像はきわめて少なく、わが国の彫刻史上貴重な基準作例として知られている。

本像とよく似た作風の像が善水寺近辺と比叡山周辺に点在しており、これらの像が同じ系統の仏師工房によって制作されたと考えられる。なお、本堂内には本尊と同系の仏師作と考えられる梵天・帝釈天立像のほか、四天王立像、兜跋毘沙門天立像、持国天・増長天立像、不動明王坐像、仁王像、僧形文殊坐像（以上すべて重要文化財）など、平安時代から鎌倉時代にかけての古像が安置されている。